

二〇二四年二月一六日

春雨の音なく濡らす草葎
瀬を洗ふ春水綺羅の星のごと
農終へて洗ふ長靴水温む

わかば
わかば
みきお

二〇二四年二月一五日

蕎麦幟飛ばれてをる春疾風
みどり児の産髪撫でて風光る
春一番大楠悲鳴あぐるごと
囀の洗礼浴びつ遠散歩
足元に恐れを知らぬ雀の子
水仙の路辺へ傾く車窓かな

かえる
むべ
澄子
こすもす
みきお
千鶴

二〇二四年二月一四日

ひと本に紅白散らし梅匂ふ
海峡の波たおやかに鱭東風
尾根つづる耐寒錬の子らの列
見はるかす古都湖のごと霞みけり

むべ
千鶴
せつ子
せいじ

二〇二四年二月一三日

ぼんぼりのごと塀越えて枝垂梅
辿り着く丘の上の梅まだ固し
バスはいま夜寒の谷戸のそこひかな
船汽笛飛び交ふ沖の春霞
この道や馥郁として夜の梅
幾万の綺羅の波延べ春の川

康子
あひる
澄子
智恵子
むべ
えいじ

二〇二四年二月一二日

ハミングのごとき音色や春の川
水脈曳くは鯉の背鰭や風光る

かえる
康子

あひ会釈してゆづりあふ梅小径

あひる

咲きつぎて地に触れなむと枝垂梅

むべ

野良猫に手向く寒夜のダンボール

ぽんこ

二〇二四年二月一日

脱サラの長子が春田打ちにけり
梅が香の日だまりに腰下ろしけり
背きあふ籬のなかの水仙花
春日燦縁に肩寄せティータイム
着膨れの客で満載シャトルバス
凍返るお地藏さまは素足なる
黒ぼこへ影の染み込む残り雪
手水舎に注ぐ三筋の春の水

きよえ
なつき
ぽんこ
康子
みきえ
うつぎ
かえる
あひる

ふらここの少女の胸の反り返り

澄子

逆立ちに蜜吸ふめじろ梅万朶

むべ

二〇二四年二月一〇日

多島海どれがどの島航うらら
じぐざぐに登り愛でゆく梅の丘
春宵の門灯ほのと点りけり
眉のごとき細き目で笑む土雛
春うらら花壇ベンチに長話
門に立つ不許葷酒の碑梅香る
窓ちよつと開けて雪見の終ひ風呂
ジオラマの如き電車や春がすみ

千鶴
あひる
澄子
なつき
満天
よう子
かえる
あひる

毎日句会みゆる選・二〇二四年二月一八日